



サッポロビール園

サッポロビール株式会社(以下サッポロビール)が9月に150周年を迎える。サッポロビールは1876年に開拓使が設立した開拓使麦酒醸造所が前身とな...

ビールと紡ぐ未来の札幌

サッポロビール創業150周年

2000年企業としてのサッポロビール。150周年を祝うだけでなく、皆さんに必要とされるサッポロビールについて再考する年だと考えています。初めに記者が150周年という年にどんな何を行い、どんな未来を描

愛されるサッポロビール。次に、サッポロビールの自慢の製品について尋ねた。すると牧野氏は全ての製品が素晴らしい出来であると言った。サッポロビールは製品の価値を生み出す場所や状況などとの関連を大切にしている。その一環として、北海道旅客鉄道(株)とサッポロクラシック(株)が共同企画でサッポロクラシックR北海道スタートレインデザイン缶を2025年に数量限定で販売した。電車の長旅のお供に、外の景色を眺めながら飲むビールは格別である。北海道という地域に150年間根差してきたサッポロビールはこの地域をよく知り、そして地域から愛されてきた。そのため

「情報1」が加わった共通テストとなった。そこで本記事では、北大工学部在籍の記者が実際に26年度の「情報1」の問題を解き、傾向や難易度について述べていく。予習は無し、制限時間は規定通り60分で行った。

記者が高校時代の数学で学んだ内容が主であった。採点結果は、第1問20点、第2問30点、第3問25点、第4問25点、合計は100点満点で75点となった。なお、大学入試センターの発表によると平均点は5.6・6.9・3点であった。前年度と比べて大幅に難化しており、単に知識の有無を問うだけでなく、知識を用いて思考させる問題が増えている。(執筆・木本へい)

北大入試に事実上初の「情報1」 現役工学部生の記者が解く！ 2026年度大学入学共通テスト

北大の前期入試も近づいてきた2月15日午後5時、記者はタイマーをセットし、試験を開始した。第1問はハードウェアや

情報セキュリティ、2進法と16進法の簡単な計算、ネットワークの仕組みに関する問題などが出題された。ここでは主に知識が問われる設問が多く見られた。第2問は、役所を介した個人の住民証明を行う過程を題材とした問題と、画像の透視変換を行う際に必要な演算に関する問題。高いレベルの論理的思考力が求められる。難易度の高い問題であった。第3問は文化祭の展示を題材とし、待ち時間と体験時間をプログラミングで調整するものだった。第4問は桜の開花予想を題材としたデータ分析の問題。

就職活動に「情報力」ブンナビ! 2028 文化版就職ナビ



サッポロ生ビール黒ラベルとサッポロクラシックを持つ牧野氏

め体験的価値を生み出すのに適している。また、製品の価値だけが企業の価値ではない。サッポロビールは高齢化や人口減少など他地域より進行している北海道の問題解決にも取り組んでいる。牧野氏はその一例として、地域の農家から麦を購入することによる地域産業の活性化を挙げた。雇用創出や経済の発展、それらによる人口の増加などにサッポロビールは大きく関わっている。他にも北大で行った適切な飲酒の方法の指導や、学生からアイデアを募って行うビジネスなど、サッポロビールは様々な側面から価値を生み出している。

「大老」の替敷。笑いたぎや、観ろ。CONTENTS

さつぽろ雪まつり 雪像制作の裏側:2面 現役北大生夫婦の育児:2・3面 受験特集「どんな道でも道は通る」:4・5面 月形町で起業:6面 プログラム:8面

「情報1」が加わった共通テストとなった。そこで本記事では、北大工学部在籍の記者が実際に26年度の「情報1」の問題を解き、傾向や難易度について述べていく。予習は無し、制限時間は規定通り60分で行った。

記者が高校時代の数学で学んだ内容が主であった。採点結果は、第1問20点、第2問30点、第3問25点、第4問25点、合計は100点満点で75点となった。なお、大学入試センターの発表によると平均点は5.6・6.9・3点であった。前年度と比べて大幅に難化しており、単に知識の有無を問うだけでなく、知識を用いて思考させる問題が増えている。(執筆・木本へい)

月形町の課題解決に学生・社会人が挑戦 第3回ツキビズキャンプ開催



ツキビズキャンプ最終発表後の記念撮影

2025年12月12日、月形町(つきがたちょう)の月形町交流センターで起業プログラム「ツキビズキャンプ」の最終発表が行われ、3人の北大生を含む学生・社会人計10人が発表に臨んだ。ツキビズキャンプとは「ツキビズキャンプ」とは、北海道月形町で行われる起業・起業育成プログラムで、今回の開催が3回目。参加者は約1カ月半にわたって地方での起業を学び、事業の考案・発表を行う。最優秀賞を獲得した参加者には起業資金として10万円が支給される。このプログラムの舞台となる月形町は、札幌から車で1時間ほどの場所にある。肥沃な大地に位置しており、稲作を中心とした農業が盛んである。一方で飲食店の不足や空き家の増加など、地方ならではの課題を多く抱えている。参加者たちは月形町の課題に向き合いながら、町の魅力を生かしたビジネスのアイデアを生み出し、今回取材したのはこのプログラムの集大成である。参加者が考案した事業の最終発表だ。第1回ツキビズキャンプで優秀賞・伴走支援賞を獲得した西岡佳子(けいこ)さん(医学部4年)は現在、4月から開始予定の民泊事業を進めている。西岡さんは自身の事業を拡大させながら、他のキャンプ生の事業のブラッシュアップなどのサポートを行っている。北海道には魅力的な町とそこで生き生きと活動する学生がたくさんいる。それを多くの人に知ってほしいという思いで、今回の最終発表もそのきっかけの一つになればと考えているという。今回の最終発表には、社会人7名、学生3名の計10

名が参加した。参加した学生はいずれも北大生で、社会人は業種も多岐にわたる。多様な職業の社会人と、学部異なる学生が一堂に会し、それぞれのバックグラウンドを生かした月形町を盛り上げるビジネス案が持ち寄せられた。大学からの案内をききかけに参加したという佐々木健太さん(法学部3年)は、「ツキがきれいで素敵」と題した月形町での「小旅行ツアー」の案を発表。自身の少し特殊な経歴と大学生生活の中で気づきから、このビジネス案を考案したという。月形町に「青春の明るさ」を創出する佐々木さんは、創路公立大経済学部で3年間を過ごしたのち、2025年に北大法学部に3年2編入。創路での学生生活や、北大編入後に会った編入生との会話を通じて、北海道の地方に向けられるまなざしの存在を意識するようになった。月形町で生まれ育った自分としては当たり前だった風景が、道外出身の友人にとっては特別に映っていることに気づいたという佐々木さん。

「月形町に「青春の明るさ」を創出する佐々木さん」の案は、本州出身の大学生を主な対象に、月形町を拠点とした小旅行ツアーを企画するというものだった。札幌などの都市部ではなく、あえて地方を訪れたいというニーズに着目。町の自然や日常を体験として切り取ることで、町の課題である「観光コンテンツの不足の解決や、月形町の新たな魅力発信につなげる狙いがある。ツアー名に「わ」には、月形町の夜空の美しさだけでなく、若者が地方で過ごす時間そのものを肯定的に捉えたいという思いを込めた。佐々木さんは「月形町に「一時的にでも滞在し、仲間と過ごす時間が、その人にとっての「青春」として記憶に残るような体験をつくりたい」と語る。発表後の質疑応答では、実現可能性や収益構造について鋭い質問が相次いだ。佐々木さんは「仮説を立て、実際の町で検証すること自

体には価値がある」と応じた。今回のツキビズキャンプを通じて、頭の中にあつた構想を具体的な事業案として言語化できたことが大きな収穫だった。月形を明るくする第一歩へ。他にも参加者が自身の経験や思いを活かしたビジネス案を次々と発表し、活発に質疑応答を行った。最優秀賞を獲得したのは、「就労継続支援B型事業所『青い花』という障がい者作業所を設立する」ビジネス案を発表した。切り花農家の金澤桃子さん。障がいを持つ弟を身近で見守る経験を活かし、障がい者が夢中になり生き生きと働ける、切り花を作る作業所を設立

する案を発表した。審査員からは「発表者の中で最もその人がやる意味があると感じさせられた点が大変良かった」と評され、自身も「すぐに出来る計画ではないが、必ず完成させたい」と意気込んだ。今回のツキビズキャンプでは、参加者それぞれが自身の原体験や関心を出発点に、月形町という町と向き合った。1カ月半に及ぶプログラムの中で、参加者たちは町に足を運び、人と話し、仮説を立てて考え続けた。すべての案がすぐに実現するとは限らないが、月形町を盛り上げる第一歩となつたに違いない。(取材・執筆・撮影・赤松・木本)

「情報1」が加わった共通テストとなった。そこで本記事では、北大工学部在籍の記者が実際に26年度の「情報1」の問題を解き、傾向や難易度について述べていく。予習は無し、制限時間は規定通り60分で行った。

「情報1」が加わった共通テストとなった。そこで本記事では、北大工学部在籍の記者が実際に26年度の「情報1」の問題を解き、傾向や難易度について述べていく。予習は無し、制限時間は規定通り60分で行った。

記者が高校時代の数学で学んだ内容が主であった。採点結果は、第1問20点、第2問30点、第3問25点、第4問25点、合計は100点満点で75点となった。なお、大学入試センターの発表によると平均点は5.6・6.9・3点であった。前年度と比べて大幅に難化しており、単に知識の有無を問うだけでなく、知識を用いて思考させる問題が増えている。(執筆・木本へい)

AFC ASASHI FAMILY CLUB 新規会員募集中! アサヒファミリークラブ(AFC)は、朝日新聞北海道支社オリジナルの会員制クラブです。どなたでもご入会いただけます!

北海道大学新聞は 創刊100周年を迎えます 2026年、1つの新聞が産声をあげた。大学生が北の大地から綴る「北海道帝国大学新聞」...







受験特集
どんな道でも
道は道

人生に「回り道」はない
第7回 学びたいことを追って——挑んだ“編入試験”

「大学には、いろんな人がいる。そんな言葉を、誰しも一度は耳にしたことがあるだろう。聞けそうで聞けない、在りし日の話を取り上げる特集『どんな道でも、道は道』はたから見れば小さな、でもそばにいれば小さな選択にじつと目を傾ければ、等身大の北大生が見えてくる。」



「北大を出ていく」異色の決断をした島崎一輝さん(撮影:古谷)

これまでたくさん北大生を取材してきた本特集。再受験、高卒認定、仮面浪人……様々なバツグラウンドを持つ受験生たちにとって、北大はずっと「ゴール」であり続けた。だが、北大に入ってくる受験生が居る一方で、北大を出ていく受験生も居る。彼らは何を思い、そして北大を去ることを決めたのか。

「夢を抱き、夢を叶えたい」
「ここに来た皆さんは一級建築士を目指していることと思います」2025年4月、所属する北大工学部環境社会工学科建築・都市コースの説明会で前に立った教授が、開口一番にそう言った。その時に抱いた気持ちを、島崎さんは今でも覚えている。進みたい道は別だ。

「3年次編入という選択」
ここで話は冒頭のコース説明会に戻る。今の場所では自分のやりたい研究が得意に感じられなかった島崎さんは、その日のうちに所属を変え、新しいことに挑戦することを決めた。島崎さんは、この研究を大々としてしてみたい、と思うようになったという。

「編入試験」の挑戦
編入試験への挑戦を決心し、両親に電話すると、すんなり了承をしてくれた。島崎さんが建築・都市コースを選んだ時点で、向いていないのでは、かと感じていた両親は、驚くようなことでは無かったのだ。「本当に物理がやりたいんだよね、これ以上変えないうえ、ね？」これ以上変えないうえ、ね？

「回り道」はない
「北大にきたこと、色々な人に会えた、色々な経験ができた、色々な価値観に触れることができた。何より「北大にきたからこそ自分が研究したいことを見つけた」と島崎さん。大学生活を通して自分と向き合っていく。取材・執筆:古谷

探検部の活動の様子

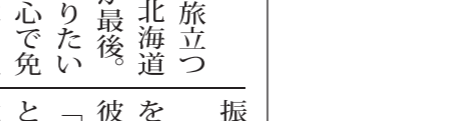


探検部の活動の様子

最後の北海道生活

編入試験から2週間余り、北大のテストが本格化する7月23日に合格発表を迎えた。今度はアイドルグループ「嵐」の音楽で心を落ち着かせる。予定より30分ほど遅くに発表された番号一覧を、島崎さんは丁寧に確認した。

道北旅行の際に撮影したまっすぐに伸びる道



道北旅行の際に撮影したまっすぐに伸びる道

「どんな道でも道は道、回り道は存在しない」

「どんな道でも道は道、回り道は存在しない」
「北大にきたこと、色々な人に会えた、色々な経験ができた、色々な価値観に触れることができた。何より「北大にきたからこそ自分が研究したいことを見つけた」と島崎さん。大学生活を通して自分と向き合っていく。取材・執筆:古谷

北海道大学新聞 創刊100周年
北大新聞は皆様のおかげで2026年5月14日に創刊100周年を迎えます
活動継続のためご寄附を募集しています

力をつけよう」と雑念を振り払ったと答えが返ってきた。その言葉通り、生活の全てを編入試験に向けてカスタマイズしたという。大学の時間割は、理学部物理学の演習授業を受けて演習能力を高める代わりに、工学部の必修授業を一部履修しなかった。編入試験に失敗すれば即時留年が確定する背水の陣。それほどまでに島崎さんの決心は固かった。

「1年の頃から続けていた塾講師のアルバイトはシフトを極端に減らした。所属していた探検部は退部した。『探検部は危険も多いから、中途半端にはやりたくない』と迷惑かけられ、島崎さんはそう語る。空いた時間で、編入試験の先陣でもあるAさんと放課後に勉強をするようになった。授業が終われば図書館に急ぎ足で向かう日々。朝の時間を無駄にしないよう、朝勉強の同志を募って、朝活も始めた。ここでもX(旧Twitter)でのコミュニティが役に立った。一緒に朝活をしていた友人は、もちろん編入試験に臨んでいる訳ではない。だが目標は違っても共に勉強に向き合う仲間だったことは、ストレスの多い時期に救いになった。

「7月5日、編入試験1日目。午前中から始まる1日。記試験はまずまずの出来だった。出題されたのは力学、電磁気学、熱力学といった物理の王道分野。演習でやった成果は十分に発揮できたが、熱力学だけ上手いかなかったという。

「番号一覧の上に『数学科と書いてあったのだ。慌てて画面を下にスクロールすると、彼が目指す物理学の欄が見えた。そしてそこにはちゃんと彼の受験番号があった。あの時ほどに焦ったことは人生で数少ない、と振り返る島崎さん。積み重ねてきた勉強の成果が実を結び安心する一方で、実はまだ油断はできなかった。例年、一次試験を通過するのは7人程度。編入合格者が5人程度であるため、筆記試験を通過すれば面接はそこまで心配せずとも良かった。だがこの年、島崎さんと共に一次試験を突破したのは12人。面接でも合格者を削りに来る。そう感じた島崎さんはホテルに戻って間違えたであろう問題を復習した。

「もうか……落着か、と思ったと島崎さん。ところが、彼は落ちていなかった。画面が左右に動くことに気付いた島崎さんがピンチアウトすると合格」

「もうか……落着か、と思ったと島崎さん。ところが、彼は落ちていなかった。画面が左右に動くことに気付いた島崎さんがピンチアウトすると合格」

「もうか……落着か、と思ったと島崎さん。ところが、彼は落ちていなかった。画面が左右に動くことに気付いた島崎さんがピンチアウトすると合格」

広告サイズ 最大238mm!!
紙面ならではの幅で「北大生」に広告を届けませんか?
北大新聞はキャンパス内約30カ所で配布、SNSと違った層に届く!